



山崎正和（やまざき まさかず）
一九三四年、京都に生まれる。京都大学文学部卒。同大学院博士課程修了。現在、大阪大学文学部教授。六三年、「世阿弥」で岸田戯曲賞を、七一年、「劇的な日本人」で芸術選奨新人賞を、七二年、「海外 闘う家長」で読売文学賞をそれぞれ受賞。著書として他に、「実朝出帆」「不機嫌の時代」「柔らかな個人主義の誕生」などがある。

オイディプス昇天

一九八四年九月一〇日 第一刷印刷
一九八四年九月一七日 第一刷発行

定価一三〇〇円

著者 山崎正和

発行者 福武哲彦

発行者 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二二三二八
〒三三三電話（三三三）二二二二一
振替口座（東京）六一〇五〇九七

本文印刷 図書印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

オイデイプス昇天
目次

オイデイス昇天 7

*

オイデイス王 61

*

峠の向かうに何があるか

*

あとがき 177

裝
丁
菊
地
信
義

オイディプス昇天

オイディ
ブス昇天

時、
遠いいにしへ。

場所、

コロノスの町はづれ。エウメニデス女神を祀る聖なる森の入口。

舞台には、正面に一本の松の巨樹が聳え、数箇の柱頭の残欠らしき石塊が所を占めるばかり。天空はあくまでも深い不安な群青に輝き、鈍く遠雷の響きが聞こえる。

宮守りの男、登場。

宮守り　これは、この辺りに住まひする賤が翁しづ おきな、いく歳月、荒らぶる女神エウメニデスの神々

の宮に仕へる者。何ごとか。朝から雲ひとつない紺碧の空に、しきりと重い遠雷とほかみなりのとよもす妖しさ。もしや清らなる宮居の森に、みだりなる者の踏み入つたのではないかと見廻りに来た。ここはコロノスの町のはづれ、千年の樹々に葛かづらまつはる禁断の深山、町の民とてゆゑなき身には近寄れぬ森だ。恐ろしや。鎮まりますはまたの名をエリニユエスの神々と申し、もとは復讐の女神をんながみ、頭には蛇わしらの髪をいただき、手には紅蓮ぐれんの松明を掲げて、過ちある者を裁き給ひます。そのかみ、かの幸薄きオレステスが母をあやめて女神めがみたちに追はれたとき、由ある罪を哀れとおぼしめすアポロンがとりなし給ひ、神々をこの地に鎮めまゐらせて、呼び名も新しくエウメニデス、または慈愛の女神めがみと改め給うた。それよりこのかた、この神々は憎しみの神にして慈しみの神、たたり神にして寿ぎの神、あやしくも、ふたつの名とふたつの性さがを持つ神として世をみそなはせられます。いつきまゐらせるわれらも、神々を敬ひつつも戦まのき、めつたには森の深みに立ち入らぬ習ひ。恐れるがよい。この神々は、人の子のうちに世の常なる者は許し給はぬ。嘉みし給ふは常ならぬ者。類ひなく誇らかなる者と、類ひなく卑しめられた者だけが許されるのだ。去れ。世に人並みの幸せと人並みの不幸せを受けた人々よ。踏み入つてはならぬ。ここは、妬み多き神々の住みかなのだ。

宮守りの男、見廻りながら退場。

かはつて、杖にすがつた盲目のオイディプスが、アンティゴネに手を引かれて登場。

オイディプス　ここはどこだ、娘よ。風の騒ぎもふと息をひそめ、樹々の気はひがただならず重い。あまりに深い静けさに、さきはどから、私の耳には何やら怪しいものの囁きが聞こえるやうだ。

アンティゴネ　これは名も知らぬ、人影もない森でございます。お気の毒なお父上、でも、もうあれに、あの小さな岡のかなたに町の塔が見えます。日暮れまでにはあれにたどりついて、お疲れをいやす一夜の宿も借りられませう。

オイディプス　坐らせてくれ。町へ急いで何にならう。ひとの軒先で一夜が明ければ、またもの乞ひの一日が始まるだけだ。ひとの情けで一日延びた命は、また別の情けを乞ひ求めるために費やすばかり。犬のやうに追はれ、驢馬のやうに打たれて学んだものは耐へ忍ぶことだが、その忍従の美德もただ次の日のもの乞ひに役立つだけだ。

アンティゴネ　（父を右のうへに坐らせて）老いのおからだには辛い歳月、とりわけ、誇り高い王者の身には耐へがたいお暮らしでございませう。でも、父上は、おんみづからお誓ひになつたではありませんか。あの恐ろしい運命の滅びの日に、両の眼をお手づからそこなはれながら、それでも、けつして御自身からはお命を絶たぬと。おつしやつたはず、悪意ある神々がいつか和解の手をさしのべるまで、無残なお姿をさらしてどこまでも生きのびるのだと。

オイディプス　さうだ。このオイディプスは、神々に挑んだのだ。かつて私にひとに勝る聡い眼

をあたへ、ほかならぬその眼によつてこの世に地獄を見させた神々に。おのが手で盲目となり、私は神々の作る美しいものの醜いもの、なべて神々の誇る手業を永遠の闇のうちに追ひやつた。そして、その闇しか見ぬ人の子の姿をいつまでも神々に見せつけるために、オイディプスはけつしてみづからは死なぬと覚悟したのだ。

アンティゴネ 雄々しい父上。ラプダコスのお血筋に恥ぢぬいさぎよいお心。アンティゴネはそのお覚悟にうたれて、ながのさすらひのお供をしてきたのです。

オイディプス ふん。この勝負、神々にめつたに勝ち目はない。たとひ、神々が老残の命を奪はうとて、または奇蹟によつてこの眼に光を返したとしても、それはつまり、闇のみを執拗く見つける男に神々が耐へかねたといふことだからな。

アンティゴネ どうかお手を。その強いお心で明日もながらへてまゐりませう。お傍にはこの私がついてをります。

オイディプス (気弱く首を振る) だが、思ひがけなかつたぞ、アンティゴネ。眼には闇しか見えぬ男にも、胃の腑はやはり餓ゑを訴へ、暑さ寒さが老いの身を噛む。なんといふ皮肉だ。神神に見せつけるはずのこの姿も、そのまへにまづ巷の眼にさらし、下賤の者たちの憐みを受けねばならぬとは。娘よ、ここまで来て、私はなぜかも長く歩きすぎたやうな気がする。

アンティゴネ お疲れのせゐでございます。この森で暫くのお休みを。町へのもの乞ひには私ひとりで行つてまゐりませう。

オイディプス それはならぬ。この世に何ものも見たいものはない私だが、ただひとつ気がかりなのは、道ばたで藝をひさぎ、ひとの哀れを乞ふそなたの姿なのだ。

アンティゴネ（傍白）おゝ、父上。その姿だけはけつして御覧になりませぬやうに。あれが白眼にとまれば、父上はきつともう一度、その場でわが眼を炙ぐつておしまひになりませう。

オイディプス どうした、アンティゴネ。どこにゐるのだ。（立つ）笑つてくれ。力もない私だが、せめて傍近くゐて、気ぐらゐ高いラブダコス娘を、ひとの埒を越えた侮りからは守つてやりたいのだ。

アンティゴネ まゐりませう、父上。（傍白）御一緒にゐても、私を御覧になれないのがお身の幸せ。その気ぐらゐを売り、ひとの侮りを誘つて日々の糧を得てゐる私の姿を。（父に）待つて。誰かまゐります。

宮守りの男、登場。

宮守り 誰だ、そこにゐるのは。さだめし寄る辺ない流れ者にちがひない。恐れげもなく、この禁制の森に踏み入るとは。

オイディプス ここはどこだ。そなたはこの近くの町の人か。

宮守り 立ち去るがよい。もの知らずのさすらひ人よ。まもなく町の長老たちも見廻りに来よ

う。見つければ、敵しい掟によつて裁かれるのだ。

オイディプス 何ゆゑの掟だ。ここはどのやうな土地なのか。

宮守リ 妬み深き女神（せんがみ）の鎮まる森。由なき者が近づけば、禍ひは町のすべての家にくだるさだめだ。

オイディプス その女神は何と呼ばれる。そして、いつき祀る町の名は。

宮守リ 聞かぬがよい。いたづらに名を呼ばれることも、神々は嘉し給はぬ。

オイディプス 教へてくれ。聞かぬうちは、一步もここを立ち退かぬぞ。

宮守リ 何をいふ。愚かな年寄り。見れば盲目（めくら）だが、知慧の光さへ曇つたのか。この世には、人並みの身には知らぬがゆゑの幸せといふこともあるのだ。

オイディプス 気づかひはいらぬ。この身はありとある禍ひをなめ尽した者。知ることに恐れを抱かず、すべてを知らうとして地獄をのぞいた男だ。

宮守リ なんとといふ傲りの言葉。いましめはたちどころに身にくだるであらう。見よ。町の長老たちがもうそれ、そこに。

町の長老からなる合唱隊（コルウス）の登場。

長老たち（合唱）